

～ Part I ～

時代を映す『ロミオとジュリエット』の上演

佐々木 隆 (武蔵野学院大学・大学院教授)

シェイクスピアがいまだに世界中で支持されているのは、特定の宗教や民族にこだわらず、大仰な話ではない普遍的なテーマを扱っているからではないでしょうか。演劇からバレエ、オペラ、映画、音楽、絵画まで翻案が生まれていますが、なかでも『ロミオとジュリエット』が圧倒的に多い。日本での上演も『ハムレット』に次いで多い悲劇です。

シェイクスピアの悲劇には、登場人物の性格が悲劇を起こす性格悲劇、運命が引き起こす運命悲劇の2種類あります。『ロミオとジュリエット』にはこの2つの要素があるのが、面白い。出会いは運命的ですが、その先の行動は性格によるもの。これは、いつの世も同じですよ？ 障害があるから盛り上がるというの……そう考えると、どこでも起こりうる話で、対立構

造も身分や環境の差などに置き換えられる。だからこそ、国や文化的背景、時を超えて上演されているのでしょう。

日本人による同作品の初上演は、明治37年の小山内薫翻案『ロメオ・エンド・ジュリエット』。日本におけるシェイクスピア作品上演のなかではそこまで早くはありませんが、明治中期ごろから誕生した自由恋愛や新しい女性像の考え方の影響もあって上演に至ったのかもしれない。

明治時代のシェイクスピア作品は、舞台を日本に移すなど翻案物として、歌舞伎や新派、新劇で上演されましたが、翻訳本の充実とともに翻訳上演へと移っていきます。そして、狂言や能など伝統芸能に取り入れたり、演出家・蜷川幸雄氏の日本人としての視点から捉えた舞台など、時代とともに新しい動き

が誕生してきました。『ロミオとジュリエット』のミュージカル化もその1つです。

そしてここ数年、同作品の上演が増えていることも興味深い。お金への意識が芽生えた明治期、『ヴェニス商人』がいち早く上演されたように、恋愛観の変化など時代が影響しているのだと思います。行動の突飛さなどが現代の若い世代と重なり、むしろいまこの時代にこそ合った作品なのかもしれません。

ハムレットの言葉に「演劇は自然を映す鏡」とありますが、私はそれを「演劇は時代を映す鏡」と解釈しています。シェイクスピアは、いつも時代とともにあるのだと思います。(談)

プロフィール ● ささき・たかし
1960年生まれ。82年、駒澤大学文学部英文学専攻卒業。84年、同大学院人文科学研究科英文学専攻修士課程修了。シェイクスピアの日本への受容史を研究し、さまざまな著書、共著を上梓。現在、武蔵野学院大学・大学院教授、早稲田大学坪内博士記念演劇博物館招聘研究員。

時を超えて魅了する、恋愛悲劇の最高傑作

1595年前後に初演されたといわれる、ウィリアム・シェイクスピアの『ロミオとジュリエット』。

以来400年にわたり受け継がれ、世界各地で上演、さまざまな翻案が生まれた。

その魅力を、日本における受容史を研究する佐々木隆教授に聞き、作品世界に迫る。

資料提供：佐々木 隆(武蔵野学院大学・大学院教授)